東アジアにおける近代諸概念の成立

近代東亜諸概念的成立

鈴木　貞美・劉　建輝 編

国際シンポジウム 26

2005

International Research Center
for
Japanese Studies

国際日本文化研究センター

国際シンポジウム　第26集

東アジアにおける近代諸概念の成立

近代東亜諸概念的成立

非売品

発行日　2012年3月29日
編　集　鈴木貞美・劉建輝
発　行　国際日本文化研究センター
京都市西京区御陵大枝山町3-2
〒610-1192　電話075-335-2222
印　刷　創文堂印刷株式会社
福井県福井市問屋町1-7
〒918-8231　電話0776-22-1313

© 国際日本文化研究センター

第 26 回国際研究集会

The 26th International Research Symposium

東アジアにおける近代諸概念の成立

近代東亜諸概念的成立

鈴木　貞美・劉　建輝 編

常州大学图书馆
藏书章

2005 年 8 月 26 ～ 29 日

August 26–29, 2005

International Research Center for Japanese Studies

国際日本文化研究センター

© 2012 by the International Research Center for Japanese Studies
ISSN 0915-2822
All rights reserved by the International Research Center for Japanese Studies.
No part of these proceedings may be used or reproduced without written permission, except for brief quotation embodied in critical articles and reviews.

First edition published March 2012
by the International Research Center for Japanese Studies
3-2 Oeyama-cho, Goryo, Nishikyo-ku, Kyoto 610-1192, Japan
Printed by Soubundo Co. Ltd., Fukui, Japan

目　次

基調講演

「近代の超克」論——その戦中・戦後 …… 9
鈴木　貞美

「封建」の概念の汎用化に関する史的考察 ……67
馮　天瑜

セッションⅠ：前近代における「概念」の状況とその展開

日本における翻訳造語——「カセット効果」について…… 121
柳父　章

晚清中國「政黨」的知識系譜：思想脈絡的考察（1856–1895）…… 127
潘　光哲

“倭寇”记忆与中国海权观念的演进——明中期至清中期海防论著的初步考察 …… 159
李　恭忠

『全体新論』と『解体新書』の漢字医学術語について …… 173
張　哲嘉

日中学术用语的创制和传播——以地理学用语为主—— …… 179
荒川　清秀

セッションⅡ：近代諸概念の生成

近代中國的「國民」觀念，1895 ～ 1911 …… 189
沈　松僑

“国家”与“个人”之间——略论晚清中国对“自由”的阐述 …… 221
章　清

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

訳語「人権」の成立について…… 245
鄭　英淑

「自然」の意味について——王充の「自然」論を中心に …… 251
鄧　紅

“艺术”：双语对等下的文化压抑…… 263
刘　东

明治日本 Logic 译名的厘定 …… 271
聂　长顺

国债概念的接受和中国早期发行的国内公债…… 279
Iwo Amelung（阿梅龙）

セッションⅢ：翻訳論からのアプローチ

从“直译”到“译释”——张东荪对西方哲学新名词的译介方式…… 289
左　玉河

从酋长、伯理玺天德到大总统——晚清中国对美国总统译名的演变…… 293
熊　月之

海軍構築問題における自立主義——日清戦争と近代化の比較研究…… 301
金子　務

セッションⅣ：生成の現場とその射程

16–18 世纪西学在东亚的传播与互动——以天主教中文文献的考察为中心 …… 323
张　西平

『万国公法』の翻訳に関わった中国人 …… 357
孫　建軍

清末民初新名词新概念的“现代性”问题
——兼论“思想现代性”与现代“社会”概念的中国认同…… 367
黄　兴涛

“危机意识”的形成与中国现代历史观念变迁的对应关系 …… 385
杨　念群

あとがき…… 403
劉　建輝

プログラム…… 405
執筆者…… 412

基調講演

「近代の超克」論——その戦中・戦後

鈴木　貞美

1. 何を問うべきか

1. 1.「近代の超克」というテーマ

「近代の超克」は、古くて新しいテーマである。なぜなら、今日、人類は、西欧近代が盛んにした自然征服観に立って、地球資源の枯渇、地球環境問題を招き、自分で自分の首を絞めつつあるからだ。人類は自然環境なしに生きられず、他の生物とともに生き延びるしか道はない。そのことが国際的に合意されているにもかかわらず、依然として、歯止めがかかっていない。人類が生き延びるには、西欧近代が生んだ人間中心主義による自然征服観から脱却すること、生きる目的と手段を近代のそれからはっきり転換しなくてはならない。

人類が生き延びるために自然環境と地球の生物の存続をはかるのなら、人間中心の考えに変わりないという意見もあるだろう。だが、ヨーロッパ近代の人間中心主義は、人間を万物の長（lord of things）とするキリスト教の考えから生まれ、絶対的超越神の知性の精妙さを解明する情熱に支えられて発達した自然科学を応用して自然改造を行うものだった。それはキリスト教圏の外部を植民地化する帝国主義として展開し、労働力としての人間（奴隷）を含む資源の略奪をほしいままにした。他方、それは神学を離れ、いわば人間が神の位置について、精神の無限の自由を謳歌するロマンティシズムを生んだ。その理想が壁にぶつかると屈折してデカダンスとなって展開した。それら西欧近代の知の総体に対する反省が1970年代ころから、ほかならぬヨーロッパの自然科学者、人文社会科学者たちから発せられてきた。

たとえば、フランスの分子生物学者、ジャック・モノー『偶然と必然』（Jaques Lucien Mono, *Le Hasard et la Nécessité: Essai sur la Philosophie Naturelle de la Biologie Moderne*）[1]は、キリスト教神学に発するヨーロッパの知の体系性が法則性という神話を支えにした「必然の王国」であることを撃とうとするもくろみだった。それと前後して、木村資生が唱えはじめた、遺伝子は生き残りに有利なものが生き残るわけではないという「中立説」によって、遺伝子レヴェルの偶発性が、国際的に認定される方向にあると専門家はいう。ヨーロッパの知の成り立ちの根底に対する指摘としては、その有効性は大いに認められる。しかし、モノーが根拠とした分子レヴェルの突然変異、すなわち偶発性が、細胞や組織以上のレヴェルでも支配的かどうかについて、論証がなされているわけではない。遺伝子レヴェルの偶発性が確認されても、それがすなわち一切の必然性を撃つ根拠になるわけではない。モノーの主張は遺伝子還元主義に陥っているといわざるをえない[2]。

---

[1] 渡辺格・村上光彦訳、みすず書房、1972、Éditions du Seuil, Paris, 1970。

[2] 鈴木貞美『生命観の探究—重層する危機のなかで』（作品社、2007。以下、『探究』と略述する）第10章を参照。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

こうしたヨーロッパの知的体系の成り立ちに対する根本的な異議申し立ての提案を受け止め、検討し、知的な実践に移すには、これまで「近代」を超えようとしてきた思想についての反省を避けて通れない。ここでは、何らかの意味で「近代」のシステムを措定し、それに背を向けるだけでなく、克服しようとする考えを「近代の超克」思想と呼ぶことにしよう。

資本主義生産様式を「近代」とし、それを社会主義に転換しようとしたマルクス主義が最も明確な例だろう。カール・マルクス（Karl Heinrich Marx, 1818–83）は、貨幣と商品のカラクリを暴き、資本の無政府的展開が国際恐慌を引き起こすしくみを解明した。その理論は、一世紀を超えて有効だった。だが、世界恐慌が世界同時革命を引き起こすという彼の予測は外れた。革命を起こす主体の条件が国によってまちまちだったからである。経済システム還元主義の欠陥は明らかである。労働者と農民を結びつける方式でロシアの専制国家体制を打ち倒したのはレーニン（Влади́мир Ильи́ч Ле́нин, 1870–1924）だった。マルクス・レーニン主義は、生産を国家管理の下に置く計画経済によって恐慌を回避し、国家社会主義の有効性を示し、その応用を国際的に流行させた。日本も例外ではない（後述する）。第二次大戦後には、資本主義と生産力と科学技術を競い合い、半世紀弱、世界を二分する勢力になった。だが、1990年代にソ連とソ連圏は崩壊し、その体制が強権政治によって支えられてきたことが明るみに出された。その意味での「近代の超克」の壮大な実験は挫折したのである。中国は市場解放政策をとり、今日では日本を追い抜き、GDPはアメリカに次ぐ世界第二位になっている。

そして日本では、「近代の超克」に、上に述べたものとは異なる暗い影が宿っている。第二次世界大戦期に「大東亜戦争」を支える思想として「近代の超克」が唱えられ、それが尾を引いているからである。それについては、これまで主に、文芸批評家、河上徹太郎が主催した文芸雑誌『文学界』「知的協力会議　近代の超克」（1942年7月開催、9、10月号掲載、単行本、創元社、1943、以下、『文学界』座談会と略記）がとりあげられてきた。第二次大戦後、竹内好「近代の超克」（1959）が「大東亜戦争は、植民地侵略戦争であると同時に、対帝国主義の戦争でもあった」[3]と述べる際に、その座談会をとりあげたことも響いている。

竹内好は、1933年、中国文学研究会を結成し、官製の「漢学」や「支那」学を批判し続け、1942年12月の第一回大東亜文学者大会に際して、中国文学研究会の非協力を表明、翌年3月には研究会を解散した。戦時下、国策への抵抗を貫いた彼は、戦後は一貫して中国革命に共感を寄せ、「国民文学の問題点」（1952）では、西洋化に向かった近代日本の「奴隷性」[4]を問題にした。そこには、彼自身が身につけた「西洋近代」に「アジア諸民族の伝統」を対置する構図が働いている。彼は、反帝国主義ナショナリズムの立場から、「大東亜戦争」はアジア解放の性格を半分もっていたと指摘したのだった。

その後、上山春平「大東亜戦争の思想史的意味」（1961）が自ら海軍で戦った経験から、日本の侵略戦争がやはり二重の性格をもっていたことを指摘した[5]。そこには、このままでは果敢に戦った兵士たちが浮かばれないという心情がにじんでいる。これらは、1960

[3]『竹内好全集8』筑摩書房、1980、33頁。
[4]『竹内好全集7』筑摩書房、1980、50頁。
[5]『上山春平著作集3　革命と戦争』法蔵館、1995所収。

年のアメリカとの安全保証条約の改定をめぐって、国論を二分するほど反米民族主義が高揚した時期に、その波に向けて提出されたものだった。

それらに便乗するかたちで、戦前のアジア主義をリードしたひとり、頭山満（1855–1944）に教えを受けた葦津珍彦（うずひこ）の『明治維新と東洋の解放』（1964）は、「満州国における日本人のなかには、東洋の解放者としての意識と、東洋の圧迫者としての意識が混在し、相激突していた」[6]といい、日本の植民地統治一般に拡張して、軍人や官僚にも意識の二重性があったと論じた。その底には「皇道は覇道を拒否するゆえにアジア解放を意味した」という考えが響いている。また、林房雄『大東亜戦争肯定論』（1964）は、幕末維新以来の「東亜百年戦争」という歴史観を開陳した。

だが、それらより前に、日本近現代の「近代の超克」思想について論じた論文があった。丸山真男「日本の思想」（1957）である。天皇に至上の価値が置かれ、責任がゆだねられるために個々人が責任をもたない日本近現代の精神構造を指摘し、家父長的ないしは「情実」的人間関係、すなわち「共同体的心情」を吸い上げ、調整することによって権力機構が保たれるしくみを説いたものとしてよく知られる。日本においては「思想が対決と蓄積の上に歴史的に構造化されない」ことが「伝統」になってきたこと、さまざまな思想の断片が雑居しており、「『伝統』思想のズルズルべったりの無関連な潜入」が絶えず行われることも指摘している[7]。この論文は、日本人の行為の主体性の弱さを、また各専門が蛸壺のようになり、議論がオープンに行われないことを鋭く批判する他の二篇のエッセイとともに、『日本の思想』（岩波新書、1961）に収められ、戦後民主主義を代表するものと目されてきた。そこに「一家一村『水入らず』の共同体的心情あるいはそれへの郷愁が巨大都市の雑然さ（無計画性の表現！）に一層刺戟され、さまざまのメロディーで立ち現われる『近代の超克』の通奏低音をなす」[8]と述べられている。通奏低音は、変わらずに続く和音の最も低い音をいう。上の音が変化することでメロディーが変わる。農村の「共同体的心情あるいはそれへの郷愁」が日本の「近代の超克」思想の根底を流れているという意味である。

丸山真男は「近代の超克」の発生を、明治期の欧化主義とほとんど同時に登場するという。なぜなら、すでに西欧近代が「危機」を招いていたからだとし、例として岡倉天心『日本の目覚め』（*The Awakening of Japan*, 1904）から「冨の偶像崇拝」に陥った西欧の現実を非難する文章を引いている[9]。西欧近代を日本ないしは東洋の伝統精神で撃つ思想に、丸山真男ほど敏感な思想家はいなかったかもしれない。

また、これらとは別に、マルクス主義哲学者、広松渉が、カール・マルクスの思想は資本制生産様式が生む物象化の問題に取り組んだものであり、それこそが「近代の超克」であるとする立場から、『「近代の超克」論—昭和思想史への一断想』（1980）などで、西田幾多郎らの「近代の超克」論は「近代知の地平」にとどまると主張していた。だが、西田幾多郎は、その出発期の『善の研究』（1911）で「近代に於て知識の方が特に長足の進歩をなすと共に知識と情意との統一が困難になり、此の両方面が相分れる様な傾向ができ

[6] 葦津珍彦『明治維新と東洋の解放』新勢力社、1964、203 頁。
[7] 丸山真男『日本の思想』岩波書店、1961、11 頁。
[8] 同前、50 頁。
[9] 同前、27 頁。

た」[10]と述べている。知情意の分裂を近代的疎外と見て、それを克服する意図を明確にしていた。また「現代の哲学」(1916) では、理性の自由、我の自由を見いだしたロマンティシズム－対－実証主義の対立を超える新しい哲学の流れを知覚や経験に出発点をすえる――のちに現象学と呼ばれる――哲学に見ていた。「新カント学派の人々もその反対と見らるべき心理主義や実用主義又は直観主義の人々も同一である」[11]と。

何らかの「近代」を措定し、それを超えることを目指す考えを「近代の超克」思想と呼ぶ立場からは、西田哲学は、紛れもなく、そのひとつに数えられる。逆に、「疎外論」は「近代知の地平」にとどまるとして、「近代の超克」をマルクス主義に限るのは、広松独自の基準による裁断である。それゆえ、ここでは、広松の論議はとりあげない。

これまで、これら日本近現代の「近代の超克」思想、第二次大戦期のそれ、そして、それを論じた戦後の思想について、統一的な視点から検討した研究はなされてこなかった。ここで、それを試みたい。それには、まず、「近代の超克」が唱えられる場合、また問題にされる場合、論者たちが、いったい何をもって「近代」としているかを問い返さなくてはならない。日本の「近代の超克」をめぐっては、これまでに引いた例では、竹内好、上山春平、葦津珍彦、林房雄は西洋列強の帝国主義、丸山真男は資本主義の意味で用いている。資本主義と帝国主義は密接に関連するが、資本主義が帝国主義として展開するとは限らない。それゆえ、これらふたつは区別すべきである。そして、今日では一般に「国民国家」の成立をもって「近代」と呼ぶことも行われている。これらの「近代」概念の成立と変容を検討すること抜きに、戦前・戦中期の「近代の超克」思想を論じることはできないだろう。

なお、第二次大戦後、相手の国家権力を侵すことなく、経済侵出する形態を「新植民地主義」と呼ぶ人びともいる。だが、大英帝国の植民地から独立したアメリカ合衆国は、19世紀の内から「領土保全・門戸開放」を世界戦略にしていた。対スペイン戦争に勝った対価として、一時期、フィリピンを領有した（1898年）が、やがて自治権を認め（1916年）、1934年には10年後の独立を約束した。アメリカは第二次大戦後、ソ連と対峙しつつ各国への影響力を強めてゆくが、政治、経済、軍事が密接に関連するしくみは、ソ連と第二次世界大戦期の帝国主義が顕著に示したもので、それ以降の冷戦時代のものとして考えるべきだろう。また、イスラム原理主義過激派のテロを徹底的に抑える政策は、国内に不穏な動きを抱えるロシアや中国などとも協調して実施された。主要国家間の協定によって恐慌や破綻を回避する国際経済協力は1885年のプラザ合意を指標とするグローバリゼイション時代の新戦略というべきである。

もう一度いうが、今日、問われているのは、人間中心主義による自然征服観である。1885年、福沢諭吉「脱亜論」がヨーロッパ近代にキャッチ・アップしなければ、日本は立ちゆかないと考え、「亜細亜東方の悪友を謝絶」し、「脱亜入欧」の道を進むべきだと説いたことはよく知られる[12]。では、西欧近代文明を受容した日本において、人間中心主義による自然征服観は、またそれに対して、日本ないしはアジアの伝統主義は、どのように展開したのか。それらと、第二次大戦期の日本における「近代の超克」思想とは、どのよ

[10]『西田幾多郎全集 1』岩波書店、1965、47頁。
[11] 同前、349頁。『探究』第6章を参照。
[12]『福沢諭吉全集 10』岩波書店、1960、238～240頁。

うに関係するのか。それらについて問い直さなくてはならないだろう。

戦時期の「近代の超克」論議、『文学界』座談会に提出したリポート「近代の疑惑」で、若き文芸批評家、中村光夫は、当時盛んになっていた日本の「近代化」をすなわち西洋化とする思考パターンそのものに疑問を呈し、明治以降の知識人が科学崇拝癖に陥ってきたという指摘をした。丸山真男『日本の思想』は、それを「理論信仰」[13]と呼び換え、それがしかし、「実感信仰」[14]と組み合わされる精神のしくみを論じている。これらは、ジャック・モノーの告発したヨーロッパの「必然の王国」と関連するのかどうかも検討すべきかもしれない。

戦後の日本では、明治以降の日本は、「脱亜入欧」、言い換えると「近代化すなわち西洋近代化」を進めることを、まるで国是としてきたかのように考える傾向が強かった。だが、日中戦争のさなかの日本では「大東亜共栄圏」が国是とされていた。戦中及び戦後には、日露戦争後、いや明治維新期から、対米英帝国主義戦争に向かう戦略があったという議論さえなされてきた。本稿では、これらの議論について、その形成過程を検討し、解決を与えるつもりでいる。その作業は、日本近現代思想史の全面的な見直しに向かうことになるだろう。

その作業の前提として、まず、戦時期の「近代の超克」論を代表するのは『文学界』座談会だったのかどうか、それ以外に当時、より影響力の強いものがなかったどうか、を検討しておこう。

1. 2.『文学界』座談会と京都学派座談会

『文学界』座談会は、当時、第一線で活躍中の多士済々のメンバーを集め（『文学界』周辺の文化人として、文芸批評家・小林秀雄、中村光夫、作家・林房雄、詩人・三好達治、音楽家・諸井三郎、『日本浪曼派』グループから亀井勝一郎、京都学派から仏教哲学者・西谷啓治、西洋史学者・鈴木成高、科学史家・下村寅太郎、物理学者・菊池正士（せいし）、カトリック神学者・吉満義彦、映画界から津村秀夫）、あらかじめリポートを提出させた上で会議を行った。

この会議は、河上徹太郎が、1933 年から国際連盟知的協力委員会の中心人物として活躍していたフランスの詩人、批評家のポール・ヴァレリー（Ambroise-Paul-Toussaint-Jules Valéry, 1871–1945）に対抗して――河上は単行本『近代の超克』の「結語」にヴァレリーの名前を出し、非難している――、対米英戦争に突入して 7 カ月後の日本の文化を「近代の超克」ということばで括り、対外的に発信しうる思想の内実をつくることを狙ったものだった。河上は、会議を次のことばではじめている。「十二月八日以来、吾々の感情というものは、茲（ここ）でピタッと一つの型に決まりみたいなものを見せて居る。この型の決まり、これはどうにも言葉ではいえない、つまりそれを僕は『近代の超克』というのですけれども」[15]（旧漢字、旧仮名遣いを現行表記に改めた。以下、同様）と。

だが、集まったリポートは、あまりに内容が多岐に渡り、会議に収集がつかなくなることは、河上にも予測できた。文化の歴史性と永遠性、精神と機械、宗教性、弁証法的論理

[13] 丸山真男『日本の思想』岩波新書、1961、57 頁。
[14] 同前、53 頁。
[15]『知的協力委員会　近代の超克』創元社、1943、44 頁。以下『近代の超克』。

など重要なテーマを設定して進めたが、河上徹太郎が単行本の「結語」に「会議全体を支配する異様な混沌や決裂」[16]と記しているとおりのものになった。

たとえば、亀井勝一郎「現代精神に関する覚書」（10月号）は、「共産主義の瀰漫とやがて（の――引用者）崩壊」の後、「古典の精神」がいわれているが、表面的に謳歌されるだけにすぎない、この「精神の危機」「言葉の危機」は、西洋の機械文明がもたらしたものだとして、言葉に宿る「無限の思い」「言霊の幸わう国」の復活を訴えている[17]。林房雄「勤皇の心」（1941年、大東塾の機関誌に寄せたものを再提出したもの）は、「私も左翼人の一人であった。我が罪の大きさにおののきつつ、今この文章を草しつつあるが、我が心の歴史をふりかえって、我をして左翼に到らしめた原因はいずこにあるか。（中略）それは明治中期以降の文学であった」、その「神の否定、人間獣化、合理主義、主我主義、個人主義」が「『神国日本』の否定」に帰結したのだという[18]。三好達治は、文部省の古典尊重も牽強付会が横行していると現状への不満をぶつけている。

日本の明治期についても、1920年代からのアメリカニズムの浸透への対処法についても意見は対立し、まったく議論はかみ合わなかった。とくに津村秀夫のリポート「何を破るべきか」が、映画によく現れているアメリカニズム、「人間生活の人工化と機械文明の魔力」[19]の克服を強く訴えているのは、ヨーロッパを重んじて、それを軽視する傾向が強かったからである。

反響は、ほとんど見当たらない（単行本初版6000部のみ確認）。当時の知識人たちの意見の方向があまりにまちまちであったという以外に、今日、内容を細部にわたって検討する価値があるとは思えない。京都学派については、のちにふれる。

ただ、『文学界』座談会で、若手の文芸批評家、中村光夫が軍国主義に同調する発言を一切しておらず、提出したリポートの「『近代』への疑惑」というタイトルを敗戦後の彼の評論集のタイトルに用いたため、戦時下にもリベラルな態度を貫いたとして、高く評価された[20]。それは、中村光夫を戦後文芸批評の主流のひとりに押しあげる原動力になった。実際、ここに彼の戦後における文芸批評の基本姿勢が出ている。

そのリポート「『近代』への疑惑」は、「近代の超克」ということを言い出したのは、ほかならぬ西洋の一部の思想家ではないか、と切り出し、「日本の近代は外国からの慌ただしい（近代物質文明の――引用者）移植」に走らざるをえなかったため、西洋といえば、主にその「科学文明――物質文明」の面を見てきたこと、そこに「反省すべき課題がある」と問題を提起している[21]。「明治以後の我国は西洋の影響によって近代化したとは、多くの歴史家の説く常識」であり、今日の日本では「西洋の影響が深く僕等の生活に浸み透っている」が、それが「『西洋』を『近代』の同義語と見る浅薄な謬見」をはびこらせているという[22]。ここまでは亀井勝一郎らの意見とさしてちがわないように見えるが、中村光夫は、西洋では芸術家たちが近代文明と戦ってきた伝統がある、その西洋の精神を知らず

---

[16] 同前、182頁。
[17] 同前、3～9頁。
[18] 同前、118頁。
[19] 同前、140頁。
[20] 長谷川泉「中村光夫」『新潮日本文学小辞典』新潮社、1968、『新潮日本文学辞典』同、1988。
[21] 『近代の超克』167頁。
[22] 同前、171頁。

に、浅薄な「知識」だけが横行する「一種の精神上の不具が広く一般の時代の病弊として生じた」[23]と述べ、「かつて西洋を担いだと同じような調子で我国の古典を担いでいる」ことを「時代の病弊」と呼び、それを「はっきり意識することに、その超克の第一歩があろう」と主張し、「西洋に圧迫を感じなくなった」今こそ、「本当に西洋を理解する好機」であると結んでいる[24]。

確かに中村光夫は、このリポートでも座談会でも、軍国主義や「大東亜戦争」に積極的に同調する意見を述べているわけではない。が、「西洋に圧迫を感じなくなった」今、というのは対米英戦争の勝ち戦を背景にした物言いである。小林秀雄も西洋を知ってこそ、日本の古典の意義がわかるという意味のことを「満洲国」総合雑誌『藝文』(1943年8月号)の座談会「小林秀雄氏を囲む」で述べている[25]。実際、この時期には、天皇制と戦争を批判する姿勢さえ見せなければ、何を言っても弾圧の対象にはならなかった(後述する)。要するに、中村光夫のリポートの主要な点は、「『西洋』を『近代』の同義語と見る浅薄な謬見」を指摘することに尽きている。それは、たとえば林房雄や亀井勝一郎らが最近まで、その立場に立っていたにもかかわらず、俄かに日本の伝統精神に反転したこと、その安易さに疑問を投げるものだったのである。

『文学界』の会議が討議に入ったところで、まず鈴木成高が現下の戦争は「近代の超克」戦争と考えられると述べている[26]。だが、その戦争の性格規定についての論議はなされなかった。すでに二回、京都学派の俊英たち、高坂正顕(哲学)、西谷啓治、高山岩男(文化哲学)、鈴木成高の四人は、総合雑誌『中央公論』で「大東亜戦争」について座談会を行っていた。その第一回「世界史的立場と日本」は、1941年11月26日、まだかなり多くの国民が、対米交渉がうまくゆくように願っていた開戦直前に行われたもので、緊迫する世界情勢に対して世界史の進路を変えるよう、日本は行動すべきだと訴えていた。この座談会が翌1942年1月号に掲載されると、1941年12月8日の対米英蘭戦争の開戦を予言したかのようにいわれ、第二回の「東亜共同圏の倫理性と歴史性」(1942年3月、『中央公論』4月号)はかなり注目された。

そこでは、京都学派を代表する西田幾多郎の哲学、とりわけ「歴史的生命」や「私と汝」の相互性の哲学を引用しつつ、ドイツの歴史家、レオポルド・フォン・ランケ(Leopold von Ranke, 1795–1886)の語を転用した「モラリッシュ・エネルギー」(道徳的生命力)の発現としての「大東亜戦争」が語られる。それが彼らのいう「皇戦」「聖戦」の意味である。日本には、資本主義や帝国主義のみならず、コミュニズムはもちろん、全体主義やファシズムもナチスの人種差別も否定し[27]、個人主義、自由主義、ヒューマニズム、民主主義、民族主義など、いわば一切の近代的原理を超える創造性が問われているという。第二次近衛文麿内閣の「基本国策要綱」(1940年7月)に登場する「八紘一宇」は家族国家論をアジアに拡大することのように論理化され[28]、それによる「世界史的指導性」の内容は多元主義(pluralism)に立つ「大東亜共栄圏」構想であると論じられる。「生々発展」する歴

[23] 同前、176頁。
[24] 同前、179～180頁。
[25] 『藝文』1943年8月号、復刻版、ゆまに書房、2008、64頁。
[26] 『近代の超克』193頁。
[27] 同前、196～198頁。
[28] 同前、229頁。

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com